

幼稚園児におけるひとり行動の変容と意味

—3歳児と5歳児との比較—

田 窪 み ゆ り^{*}・掘 越 紀 香^{**}

【要 旨】 本研究では、3・5歳児の「ひとり行動」（ひとりである、または、一緒にいるがやりとりがない行動）を観察し、年齢や時期による変容を検討した。3歳児では「傍観・大人」「ふり遊び」が多く、5歳児では「傍観・子ども」「構成遊び」「平行・連合遊び」が多かった。園生活への慣れ、仲間への関心、保育内容によって、ひとり行動に変化が見られた。また、ひとり行動の年齢による違いやある幼児の時期的変化を事例から分析し、ひとり行動の意味を考察した。その結果、ひとりで過ごすことによって気持ちが切り替えられること、ひとり遊びを充実させることで、いずれ自発的に遊び出すことが示唆された。

【キーワード】 3歳児と5歳児 ひとり行動 非社会的遊び 変容

I 問題と目的

幼稚園の子どもたちを見ていると、仲間と楽しそうに遊んでいる姿も多く見られるが、ひとりで過ごしている子どもの姿も見られる。

大人の目からすれば、ひとりで遊んでいる子どもの姿は、仲間はずれにされているのではないかと、友だちとうまく関われないのではないかと心配の種になることも多い。心のどこかで、友だちと一緒に遊んでほしいという思いがあるからだろう。

これまでは、ひとりである子どもの特徴や、ひとりであることの影響について、非社会的遊び (non social play) や社会的適応などとの関連についての研究が行われてきた。

非社会的遊びとは、周囲に遊び可能な相手がいる状況において、社会的相互作用の見られない遊び (Coplan, 2000) と定義される。Coplan らは、この非社会的遊びを、沈黙行動 (reticent behavior)、ひとり静的行動 (solitary passive behavior)、ひとり動的行動 (solitary active behavior) の3つに分類した (Coplan, Rubin, Fox, Calkins & Stewart, 1994)。「沈黙行動」には、傍観的行動と何もしていない行動があり、対人不安のような内面的な不適応の問題と関連があると言われている (Coplan et al., 1994; Coplan, 2000)。「ひとり静的行動」は、ひとりでの構成遊びとひとりでの探索遊びがある。この行動は幼児期の遊びの中でよく見られるもの

平成24年5月31日受理

* たくぼ・みゆり 大分大学教育福祉科学部 生活・技術講座

** ほりこし・のりか 奈良教育大学教育学部 幼年教育専修

であり (Coplan, 2000), 一般に就学前においては社会的不適応との関連が見られていない (Coplan et al., 1994)。「ひとり動的行動」は、ひとりでの機能遊び (感覚運動遊び) とひとりでの劇遊び (ごっこ遊びなど) があり, 問題行動や仲間はずれとの関連が指摘されている (Coplan et al., 1994)。

国内では, 大内・櫻井 (2008) が, 幼児 (4 歳児) の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動の関連を検討している。非社会的遊びが多く見られる時期や性差を考慮して子どもの姿を捉え, 社会的スキルを学ぶための介入の必要性を述べている。例えば, 沈黙行動は, 主張スキルの低さとは関連したが, 問題行動とは関連せず, 長期的な社会的不適応の心配はないという。しかし, ひとり静的行動は, 没頭していても長期的に続くなら, 十分な主張スキルを獲得できない可能性があり, ひとり動的行動は, その後の問題行動との関連が見られ, 早期介入の必要性があると指摘している。

また, 淡野 (2009) によれば, 静的遊びをしている幼児は, 自分の遊びに満足し終えると, 自らの働きかけによって, 他者との相互作用が生じることが明らかにされている。そして, ひとりで遊んでいるすべての子どもが社会的不適応状態にあるわけではなく, 非社会的遊びの肯定的側面に注目した研究が望まれると示している。さらに, 遊びと遊びの間の移動 (積み木で遊ぶために積み木まで移動) も「沈黙遊び」と定義されてしまう恐れがあるため, 非社会的遊びがどのような文脈から生じたものかを検討する必要があるとしている。

子どもたちの姿を見ていると, 非社会的遊びの様子だけでなく, 「ひとりで泣いている」「ひとりでどこかに移動している」「ひとりで掲示物や自然環境を見ている」など, ひとりの過ごし方にもさまざまあることに気が付く。また, 友だちと意見が衝突したときなどに, ひとりで気持ちを落ち着かせている姿や心地よい場所で休息している姿も見られる。

柴崎 (2003) は, 子どもたちがどのような場所でくつろいでいるかを観察し, 検討している。

3 歳児は身体的に満足しているときに, 人から見えにくい場や出入りが少ない場, 風通しの良い場を選んでひとりで過ごす様子がある。4 歳児は身体的な満足感よりも, 心理的な満足感から生じるくつろぎが多くみられ, 日当たりのよいベランダや園庭など, 友だちの姿がよく見える場所でくつろぐ姿が見られる。5 歳児はひとりで過ごす姿が少なくなるものの, 気に入った玩具をひとりで楽しむ姿があることを示している。このように幼稚園で見られる, 様々なひとりの姿に注目し, ひとりで過ごすことの肯定的意味も明らかにしたいと考える。

そこで, 本研究では, 非社会的遊びに限らず, ひとりでいる子どもの様々な場面を取り上げ, どのようなひとり行動が見られるのかを検討する。また, 幼稚園の年少組と年長組である 3 歳児と 5 歳児ではどのような違いが見られるのか, さらに, ひとり行動が時期によってどのように変容するのかについて検討することを目的とする。そして, 幼児にとってひとりで過ごすことがどのような意味を持つのかを考察する。なお, 本研究ではひとり行動を「ひとりでいる, または, 一緒にいるがやりとりがない行動」と定義する。

Ⅱ 方法

1) 対象

観察対象児は、O 市内にある A 幼稚園、3 歳児クラス 2 クラス計 32 名（B 組男女各 8 名・M 組男女各 8 名）と 5 歳児クラス計 64 名（Y 組男女各 16 名・K 組男女各 16 名、うち女児 1 名 11 月転出）である。A 幼稚園では、遊びを中心とした保育を行っている。平均月齢は、観察当初において、3 歳児は、B 組 42.4 ヶ月（レンジ 34-48）、M 組 42.8 ヶ月（レンジ 34-48）、全体 42.6 ヶ月（レンジ 34-48）である。5 歳児は、Y 組 66.3 ヶ月（レンジ 61-72）、K 組 66.0 ヶ月（レンジ 61-72）、全体 66.2 ヶ月（レンジ 61-72）である。

2) 観察時期

2004 年 4 月～12 月までの約 8 ヶ月間、自然観察法と VTR 撮影を週に 1 回、5 人の観察者で行った。登園から降園（3 歳児：午前 9 時から 11 時 30 分まで、5 歳児：午前 9 時から 12 時まで、弁当後 13 時から 13 時 40 分まで）の保育のうち主に自由遊び場面の観察を行った。始めの 1 回は観察に慣れるための期間とし、データからは除外した。総観察回数は、25 回である。

3) 観察方法

3 歳児観察は、1 週間に 1 回 B 組 16 名（男女各 8 名）、M 組 16 名（男女各 8 名）計 32 名について各 10 分程度の VTR 撮影、フィールドノーツの記録を行った。5 歳児観察は、Y 組 32 名（男女各 16 名）、K 組 32 名（男女各 16 名）計 64 名について各 10 分程度の VTR 撮影・フィールドノーツの記録を行った。

4) 分析方法

観察で VTR 撮影されたもののうち、幼児の対人的な関わりがないひとり行動を取り上げることとする。

ひとり行動の表れ方の時期的変化を明らかにするめに、時期をⅠ期：4 月、5 月・Ⅱ期：6 月、7 月・Ⅲ期：9 月、10 月、11 月、12 月の 3 期に分けることとした。

観察で得た VTR のデータとフィールドノーツをもとに、エピソードの前後を含め、対象児および対象児とかかわりを持った相手の行動、発話、表情などをすべてできるだけ詳しく文字転記した。このプロトコルに基づいて分析を行う。

エピソードの開始は、一緒にいた人と離れた時、一緒にいた人が離れた時、誰ともやりとりしなくなった時点とし、エピソードの終結は、幼児や大人に近づいてやりとりしたり、周りからの働きかけによって、やりとりが生じた時点とし、その間隔が 10 秒以上のものとした。その結果 331 事例が得られた（3 歳児：162 事例、5 歳児：169 事例）。さらに、事例の中に複数のひとり行動が含まれていることもあるため、事例をひとり行動ごとに細かく分類したものをユニットにし、804 ユニット（3 歳児：421 ユニット、5 歳児：383 ユニット）が得られた。

Ⅲ 結果と考察

1) ひとり行動の分類

観察事例の中から、幼児のひとり行動は大きく「何もしていない行動」(ホバリング、傍観、泣きなど)、「ひとり遊び」(自然遊び、試行・挑戦、構成遊びなど)、「移動行動」(移動、回避)の3つの項目に分類できた。それぞれの細かい分類については、以下の表に示す(表1)。

「何もしていない行動」においては、「傍観・子ども」(全体の19.2%)や「傍観・大人」(8.3%)「ホバリング」(7.7%)などが多く見られた。「ひとり遊び」においては、「ふり遊び」(13.9%)、「自然遊び」(9.2%)、「平行・連合遊び」(8.3%)、「構成遊び」(7.6%)などが多く見られた。「移動行動」については、「移動」(11.9%)が多く見られた(表2)。

表1 ひとり行動の分類

分類		定義
何もしていない行動 (325)	ホバリング (62)	何もしないでうろうろとしている行動
	傍観・子ども (154)	子どもを見ている行動
	傍観・大人 (67)	保育者や大人を見ている行動
	傍観・もの (29)	雨や虫、掲示物などを見ている行動
	泣き (13)	泣いている行動
ひとり遊び (376)	自然遊び (74)	土や水で遊んでいる行動や虫を捕まえている行動
	試行・挑戦 (34)	繰り返し、調整して遊んでいる、また、挑戦している行動
	構成遊び (61)	お絵かきや工作、積み木で遊んでいる、また、整理整頓している行動
	絵本・手遊び (17)	絵本を読んでいる、また、手遊びしている行動
	ふり遊び (112)	何かになりきったり、ものを見立てて遊んでいる行動
	平行・連合遊び (67)	同じ場所で同じ遊びをしているがやりとりがない、また、一緒に遊んでいるがそれぞれ自分のやりたいことをして遊んでいる行動
移動行動 (103)	生活 (11)	生活習慣に関する行動、生活中での空き時間や待ち時間に行っている遊び
	移動 (96)	ひとりどこかに移動している行動
	回避 (7)	一緒に遊んでいた集団から離れてひとりになる行動

註. () 内の数値は、度数を示す。

表2 年齢とひとり行動

	何もしていない行動					ひとり遊び							移動行動		合計
	ホバリング	傍観・子ども	傍観・大人	傍観・もの	泣き	自然遊び	試行・挑戦	構成遊び	絵本・手遊び	ふり遊び	平行・連合遊び	生活	移動	回避	
3歳	27 (6.49%)	70 (16.6%)	46 (10.9%)	16 (3.89%)	11 (2.69%)	43 (10.29%)	16 (3.89%)	24 (5.7%)	10 (2.4%)	73 (17.3%)	23 (5.5%)	5 (1.2%)	52 (12.49%)	5 (1.29%)	421 (100%)
5歳	35 (9.1%)	84 (21.9%)	21 (5.59%)	13 (3.49%)	2 (0.59%)	31 (8.19%)	18 (4.7%)	37 (9.7%)	7 (1.8%)	39 (10.2%)	44 (11.5%)	6 (1.6%)	44 (11.59%)	2 (0.59%)	383 (100%)
合計	62 (7.79%)	154 (19.29%)	67 (8.39%)	29 (3.69%)	13 (1.69%)	74 (9.29%)	34 (4.29%)	61 (7.6%)	17 (2.1%)	112 (13.9%)	67 (8.3%)	11 (1.4%)	96 (11.99%)	7 (0.99%)	804 (100%)

註. () 内の数値は、ひとり行動の分類に占める割合を示す。

2) 年齢によるひとり行動の違い

3, 5 歳児において、ひとり行動にどのような特徴が見られるのか、年齢ごとに考察していく。なお、ひとり遊びの「生活」と移動行動の「回避」は、数値が低かったため、それぞれを「絵本・手遊び・生活」、「移動・回避」と合わせた形で検討した（表 3）。

3 歳児では、5 歳児に比べ、「傍観・大人」（3 歳児：10.9%，5 歳児：5.5%）、「ふり遊び」（3 歳児：17.3%，5 歳児：10.2%）が多く、5 歳児では、「傍観・子ども」（5 歳児：21.9%，3 歳児：16.6%）、「構成遊び」（5 歳児：9.7%，3 歳児：5.7%）、「平行・連合遊び」（5 歳児：11.5%，3 歳児：5.5%）が多かった。

自由遊び場面において、3 歳児は 5 歳児より、保育者などの大人を見る「傍観・大人」やひとりで何かになりきって遊んでいる「ふり遊び」が多く見られる。3 歳児は、不安になった時などに、保育者に甘えたり、頼ったりすることが多く、仲間とやりとりするよりは、ひとりで自分の世界に入り込み、何かの役になって遊んでいる姿が多いと考えられる。一方 5 歳児のひとり行動は、仲間の姿を見ている「傍観・子ども」やひとりで絵かきや工作に取り組む「構成遊び」、同じ場所で同じような遊びをしているが仲間とやりとりがない「平行・連合遊び」が多く見られた。5 歳児は、3 歳児に比べ保育者よりも仲間に対する関心が高まっていると考えられる。また、5 歳児の部屋では製作コーナーが設置されており、その場所にお絵かきや工作をする子どもが集まって「平行・連合遊び」をする姿が見られ、ひとりで過ごしている時にも、お絵かきや工作などひとつのことに集中していた。

表 3 年齢とひとり行動の時期的変容

年齢	時期	何もしていない行動						ひとり遊び							移動行動	
		ホバリング	傍観 子ども	傍観 大人	傍観 もの	泣き	小計	自然遊び	試行 挑戦	構成遊び	絵本 手遊び 生活	ふり遊び	平行 連合遊び	小計	移動 回避	合計
3 歳児	I:4.5月	7 (15.6%)	3 (6.7%)	6 (13.3%)	3 (6.7%)	0 (0.0%)	19 (42.2%)	3 (6.7%)	0 (0.0%)	5 (11.1%)	2 (4.4%)	2 (4.4%)	2 (4.4%)	14 (31.1%)	12 (26.7%)	45 (100.0%)
	II:6.7月	9 (5.1%)	28 (16.0%)	18 (10.2%)	9 (5.1%)	6 (3.4%)	64 (38.8%)	31 (17.6%)	8 (4.5%)	5 (2.8%)	10 (5.7%)	18 (10.2%)	10 (5.7%)	82 (46.6%)	24 (13.6%)	176 (100.0%)
	III:9~12月	11 (5.5%)	39 (19.5%)	22 (11.0%)	4 (2.0%)	5 (2.5%)	81 (40.5%)	9 (4.5%)	8 (4.0%)	14 (7.0%)	3 (1.5%)	53 (26.5%)	11 (5.5%)	98 (48.0%)	21 (10.5%)	200 (100.0%)
	合計	27 (6.4%)	70 (16.6%)	46 (10.9%)	16 (3.8%)	11 (2.6%)	170 (40.4%)	43 (10.2%)	16 (3.8%)	24 (5.7%)	15 (3.5%)	73 (17.3%)	23 (5.5%)	194 (46.1%)	57 (13.5%)	421 (100.0%)
5 歳児	I:4.5月	8 (9.1%)	13 (14.8%)	8 (9.1%)	2 (2.3%)	0 (0.0%)	31 (35.2%)	5 (5.7%)	3 (3.4%)	16 (18.2%)	6 (6.8%)	4 (4.5%)	18 (20.5%)	52 (59.1%)	5 (5.7%)	88 (100.0%)
	II:6.7月	11 (8.5%)	34 (26.4%)	8 (6.2%)	6 (4.7%)	0 (0.0%)	59 (45.7%)	17 (13.2%)	3 (2.3%)	3 (2.3%)	3 (2.3%)	18 (14.0%)	8 (6.2%)	52 (40.3%)	18 (14.0%)	129 (100.0%)
	III:9~12月	16 (9.6%)	37 (22.3%)	5 (3.0%)	5 (3.0%)	2 (1.2%)	65 (39.1%)	9 (5.4%)	12 (7.2%)	18 (10.8%)	4 (2.4%)	17 (10.2%)	18 (10.8%)	78 (47.0%)	23 (13.9%)	166 (100.0%)
	合計	35 (9.1%)	84 (21.9%)	21 (5.5%)	13 (3.4%)	2 (0.5%)	155 (40.5%)	31 (8.1%)	18 (4.7%)	37 (9.7%)	13 (3.4%)	39 (10.2%)	44 (11.5%)	182 (47.5%)	46 (12.0%)	383 (100.0%)

註. () 内の数値は、ひとり行動の分類に占める割合を示す。

3) 年齢とひとり行動の時期的変容

次に、3, 5 歳児のひとり行動の時期による変化を考察していく（表 3）。

3 歳児 I 期：4, 5 月では、他の時期に比べて「移動行動」（I 期：26.7%，II 期：13.6%，III 期 10.5%）や「ホバリング」（I 期：15.6%，II 期：5.1%，III 期：5.5%）が多く、5 歳児 I 期：4, 5 月では、他の時期より、「ひとり遊び」（I 期：59.1%，II 期：40.3%，III 期：47.0%）が多かった。

3歳児は、入園したばかりのこの時期、園に慣れていないこともあり、遊びを転々と移動している姿が多かった。5歳児は、3歳児に比べて園生活に十分慣れており、遊び場や遊び道具、用具の場所や使い方を知っているためにそれぞれが目的をもってひとりで過ごしていると考えられる。この園では、進級に伴いクラス替えを行っている。4、5月は、4歳児のときに一緒に遊んでいた仲間だけでなく、新しい仲間と出会う時期である。進級に伴う新しい環境の中では、自分の好きな遊びを行うことで、自分の居場所を見つけようとしているのではないだろうか。

次に、ひとり行動の3歳児「傍観・子ども」は、Ⅰ期(6.7%)からⅡ期(16.0%)、Ⅲ期(19.5%)と時期ごとに割合が多くなっている。3歳児は、5歳児に比べると「傍観・大人」が多く、保育者などを見ていることが多かった。しかし、3歳児も園生活に慣れてくると、保育者だけでなく、仲間の姿にも目を向けられるようになり、仲間への関心が強まっていると考えられる。また、3歳児は5歳児に比べて「ふり遊び」が多く見られ、Ⅰ期(4.4%)、Ⅱ期(10.2%)、Ⅲ期(26.5%)と多くなっている。幼稚園が安心して過ごせる場所となり、ひとりの時間も落ち着いて遊ぶなど、ひとり遊びが充実してきていることがうかがえる。

なお、3、5歳児ともに「自然遊び」の割合が他の時期に比べて、Ⅱ期：6、7月に多くなり(3歳児：17.6%、5歳児：13.2%)、「構成遊び」の割合がⅡ期：6、7月に少なくなっている(3歳児：2.8%、5歳児：2.3%)。これは、この時期水遊びを行うことが多かったためと考えられ、季節によって保育者が提供する保育内容や環境構成に影響されているためだろう。

4) ひとり行動の事例による分析

ここでは、ひとり行動の流れを事例から分析し、ひとり行動の意味について考察していく。

(1) 年齢によるひとり行動の違い

年齢による違いが見られた「何もしていない行動」「ひとり遊び」「移動行動」のうち、特徴的な事例として「ホバリング」「平行・連合遊び」「回避」を取り上げる。

事例1 3歳児『何もしていない行動：ホバリング』(5月)

3歳児みんなで幼稚園を探検し、3歳児の園庭に戻ってくると、それぞれ遊び始める。保育者が「遊んでいいよ」と声をかける。

A男：いろいろな遊具の周囲を歩き、土管の中でしばらく過ごす。＜ホバリング＞

(テラスではM子が拾った実を保育者に袋に入れてもらっている。)

A男：M子の袋を見に行く。＜移動＞＜傍観・もの＞

A男：テラスにあるじょうろを取って、水を流して遊ぶ。＜自然遊び＞

その後、保育者が探検の続きをすることを子どもたちに伝える。

A男：じょうろを持ったままうろうろと歩く。＜ホバリング＞

保育者を見つけ、うれしそうに飛びついていく。その後、保育者と手をつないで室内の探検を続ける。

A男は遊ぶ時間ができたが、何をして遊ぼうかと迷っている様子であった。ブランコに向かったかと思うと、土管に入り、今度はじょうろで水を流して遊ぶなど落ち着いて遊んでいる様子ではなかった。自分のしたいことが見つけられなかったと考えられる。また、幼稚園の初めての場所へ探検に行く不安な思いがあったのかもしれない。

事例 2 5 歳児『何もしていない行動：ホバリング』（10 月）

B 男は、登園後、荷物整理を済ませると、部屋からテラスへ出たり入ったりする。

B 男：部屋の中をうろうろと歩いている。＜ホバリング＞

B 男：保育者の隣に立ってロッカー周辺にいる仲間を見る。＜傍観・子ども＞

B 男：ロッカーの近くでうろうろと歩く。＜ホバリング＞

その後も部屋を出たり入ったりしながら、仲間の様子を見ていた。

E 男：B 男に近づいてきて、腰に手を当てて「おっ！！」と言う。

その後、E 男が B 男をゲームに誘う。しかし、2 人で室内を歩くだけでなかなか遊ぶ様子は見られない。B 男はまた部屋から出る。

B 男：ホールに向かおうとするが、うろうろと歩いて部屋に戻る。＜ホバリング＞

B 男：机に並ぶ運動会の踊りのパチを見る。＜傍観・もの＞

B 男：机の隣で F 男と G 男が話をしている様子を見る。＜傍観・子ども＞

B 男：部屋をうろうろ歩く。＜ホバリング＞

B 男：H 男たちが部屋から出るのを見て、ついて行く。＜移動＞

H 男たち：ホールに入る。

B 男：少し遅れて、ホールに入ろうとする。その時、I 男が「サッカーしよう」と言いながら出てきたことに驚き、部屋に戻っていく。

B 男はひとりでうろうろと部屋やテラスを歩いていた。周囲の仲間を気にしている様子も見られ、一緒に遊ぶ仲間を探していたのではないかと考えられる。B 男に気がついた E 男や H 男が声をかけるが、B 男はどちらの誘いにもうまく乗れず、ひとりで歩いている姿が続いていた。

以上のように、3 歳児の「ホバリング」は、何をして遊ぼうか迷っているときや、保育者が見あたらず、不安になっているときなどに見られた。一方、5 歳児の「ホバリング」は、登園後に仲間を探している時や、仲間と思いや目的を共有できず、遊びが継続しないときに見られたことから、仲間との関わりが重要なポイントになっていると考えられる。

先行研究によると、「ホバリング」は「沈黙行動」にあたる。大内・櫻井（2005；2008）によると、沈黙行動の多い子どもは、協同的で従順傾向にあり、問題行動との関連もないため、長期的に心配する必要はないとされている。一方、事例 2 の 5 歳児 B 男は、普段も仲間となかなかかわれずにいる様子が見られ、保育者は日頃から気をかけ、折を見て仲間とつながるような援助を行っており、不適応傾向が見られると言えるかもしれない。ただ、事例 2 では、B 男から仲間のそばに近づいている様子から、仲間に関心を持ってかわろうとする意識は感じられる。このように少し気になるひとり行動においては、行動が見られる年齢や時期を考慮しながら、細やかな保育者の援助や配慮が必要だろう。

事例 3 3 歳児『ひとり遊び：平行・連合遊び』（6 月）

C 男は、ままごとで遊んでいたが、テラスに設置されたはしごの遊具を見つけて部屋から出ていく。N 子、P 子、R 子、J 男も渡っているが、やりとりはない。

C 男：前に渡っていた子の後ろからはしごを渡る。＜平行・連合遊び＞

C 男：最後まで行くと、始めに戻って渡る。

C 男 : 途中はしごを降りて、みんなを抜いて一番前に行く。「やったー！いえーい！」と言いつつ、もう一回始めから渡る。

C 男は仲間と一緒にしごを渡って遊んでいた。互いに渡りきるということに精いっぱいでありとりは見られなかったが、十分に満足している様子であった。C 男が前のみんなを抜いて先頭に行くが、周りの子どもたちはあまり関心を示さなかった。しばらくすると、C 男は違う遊びへ移って行った。

事例 4 5 歳児『ひとり遊び：平行・連合遊び』（4 月）

D 男 : 製作コーナーで S 子、T 子の隣で絵を描いている。＜平行・連合遊び＞

D 男 : 「できた！！」とペンを片付ける。「さあ！君の虫カードをスキャンして、緑色のカードだよ。そしたらボタンを押してね」と作ったカードを機械に通すように動かす。

D 男 : 「よし、このカードにしよう。見てごらん、ほーら、ほーら」と、周囲にいる仲間に見せる。

S 子と T 子は D 男の絵を見て微笑むが、またそれぞれ絵を描き続けている。

D 男は、製作用のテーブルで絵を描いていた。S 子と T 子も同じように絵を描いていたが互いにやりとりはなかった。D 男は描き終わってカードゲームの真似をすると、自分の描いたカードを仲間に見せている。仲間とのやりとりが見られるものの、その後は互いに自分の作業に集中していた。

以上のように、「平行・連合遊び」は 5 歳児の方が多く見られた。5 歳児の部屋では、工作やお絵かきをする場所がコーナーとして設定されており、同じような遊びに興味を持った子どもたちがそのコーナーに集まってくるためだと考えられる。集中して製作している時にはやりとりは見られないが、作ったものを見せたり評価したりする時には、仲間とやりとりする姿が見られた。仲間への関心の高さや仲間関係の強さもうかがわれる。一方 3 歳児では、一人ひとり自分のことを楽しんでおり、近くで遊んでいてもやりとりする姿はあまり見られなかった。

また、5 歳児では、工夫したり試したりする「試行・挑戦」が見られるような活動（例えば、紙飛行機作りなど）でも、時々仲間とやりとりしながら、ひとりで長時間同じ活動を続けている姿が見られ、3 歳児に比べると納得いくまで集中して取り組んでいるように感じられた。

事例 5 3 歳児『移動行動：回避』（6 月）

B 組のみんなで新聞紙を破って遊んでいた。W 子が破ろうとしていた新聞紙を誰かに取られてしまう。

W 子 : テラスに出ていく。＜回避＞

W 子 : テラスで遊ぶ M 組の仲間や新聞紙を集めている仲間、外の様子を見る。

＜傍観・子ども＞＜傍観・もの＞

しばらく周りの様子を見た後、テラスで遊んでいた仲間の中に入って楽しそうに遊ぶ。

W 子は、破っていた新聞紙を誰かに取られて怒ったような表情で、テラスに出る。しばらく周囲の仲間の様子を見て過ごした後は、テラスで遊んでいた仲間に入って楽しく遊んでいた。

テラスに出て、静かな場所へ行くことで、気持ちの切り替えができたのではないだろうか。

事例 6 5 歳児『移動行動：回避』（10 月）

Y 子は A 子といざこざをし、泣きながらピアノの後ろに行く。すぐに出てきて「大っ嫌い！」と叫ぶ。E 男が「大っ嫌いって言った方が大っ嫌いなんで！」と Y 子を追いかけて言う。

Y 子：「いやー！！」と泣き＜泣き＞、ピアノの後ろに座る。＜回避＞

Y 子：しばらくすると泣き止み、みんなの様子を見る。＜傍観・子ども＞

Y 子：外に出て行こうとするが、ピアノの後ろに戻る。しばらくすると出てきて室内を歩く。

＜ホバリング＞

A 子：「Y 子ちゃん」と後をついてくる。

Y 子：顔をそらしてピアノの後ろへ行く。

その後、ピアノの後ろで、持っているものを見せ合うなどして過ごし、みんなの方へ戻る。

Y 子は、E 男に「大っ嫌いって言った方が、大っ嫌いなんで！」と追いかけられたため、ピアノの後ろに隠れるようにして座った。涙が止まると、みんなの方を見て、ピアノの後ろから出て行こうとする行動が見られた。ひとりで過ごし、落ち着きを取り戻した様子であった。また、ピアノから出てきた時には、A 子を探しているようであり、気持ちが落ち着き、A 子と話し合おうという気持ちになったのではないかと考えられる。その後、A 子が「ごめんね」と声をかけてきた時には、顔をそらしてピアノの後ろに隠れたが、2 人で話し合うことができ、自分たちで仲直りできていた。

3, 5 歳児ともに、「回避」はいざこざや緊張状態などの後に見られた。そして、ひとりで過ごした後は、他の遊びに入ったり、仲間と話し合って解決したりするなど、楽しく遊ぶ様子が見られた。ひとりで過ごし、気持ちを落ち着かせ、立て直しができたと考えられる。

以上から、年齢によるひとり行動の違いとして、3 歳児は、保育者を探したり、安心した場所でそれぞれが遊んでいたりといた。一方 5 歳児は、ひとりで過ごしながらも、目的を持って熱中して遊んでいたりと、仲間に関心を向けていたりしていた。また、5 歳児は、ひとりで過ごす仲間に声をかける様子も見られ、仲間意識が強くなっていることがうかがわれた。

このように、園生活への慣れや仲間への関心、集中・熱中など、「ひとり行動」には、年齢による違いが見られた。

(2) ひとり行動が多く見られた幼児の時期的変容

ひとり行動が最も多く見られた 3 歳児 K 男（41 ユニット）の事例から、ひとり行動がどのように変化しているのか、時期を追って見ていく（事例 7, 8, 9）。

3 歳児の K 男は、入園当初、保育者のそばでよく遊んでいた。ミニカーやバイクが大好きで、ひとりでいても比較的集中して遊んでいる姿が多く見られた幼児である。

事例 7 『プール』（6 月）

J 男：ペットボトルを車のように走らせて水を入れる。

K 男：J 男の隣を同じようにしながら通っている。＜平行・連合遊び＞

その後も J 男について行きながら、真似をして遊ぶ。

- K 男 : 途中, B 子の様子を見る。＜傍観・子ども＞
- K 男 : J 男が B 子と一緒にワニ歩きを始めると真似をする。＜平行・連合遊び＞
- J 男 : 近くにいた保育者に「みてほら, こんなに (水) 入っちゃった。こんなに入っちゃった」とペットボトルを見せる。
- K 男 : J 男の隣で保育者と J 男を見ている。＜傍観・大人＞＜傍観・子ども＞
- J 男 : ペットボトルを車のようにして, ちがう場所へ行く。
- K 男 : その場で水を流しているので気づかない。
- K 男 : 保育者が近くにいて, 近づいていく。＜移動＞
- その後, 保育者と一緒に遊ぶ。
-

K 男と J 男は, 4, 5 月仲間と一緒に遊ぶというよりも保育者の後をついて行くなど保育者と一緒に遊ぶ傾向にあった幼児であった。保育者の近くにいた J 男が K 男にとって, いつも一緒にいる存在になっていたと思われる。この事例でも, いつも一緒にいる J 男の近くにいることで安心できていたと考えられる。しかし, J 男がどこかに行ってしまうと気持ちが少し不安定になり, 保育者のそばに移動したのだろう。

事例 8 『ミニカー遊び』 (9 月)

- K 男 : ミニカーを部屋で走らせて遊んでいる。＜ふり遊び＞
- J 男 : K 男と同じように車を走らせてやってくる。
- 2 人で競争するようにダンボールの道のところに戻っていく。＜平行・連合遊び＞
- C 子 : 人形を 2 人が遊んでいる段ボール道路の上に置き, 道をふさぐようにする。
- J 男 : 気にせず, 人形を越えて車を走らせる。
- K 男 : J 男について行くようにして, 人形を飛び越えて走らせる。
- K 男 : ミニカーを並べているところに戻り, 自分が持っている青いミニカーをダンボールの端の青いテープに沿って, 車庫入れするようにバックで置く。＜構成遊び＞
- J 男が, 2 個のミニカーを K 男に差し出し「次, どっち?」と聞くが, K 男は「もっちゃん」と答え, 受け取らない。
- K 男 : ミニカーを段ボールの端に沿って並べ続ける。＜構成遊び＞
- K 男 : 全部のミニカーを並べると「できたー!!」と J 男に言う。
- J 男 : 「全員集合!! 全員集合! 全員集合!!」
- その後, 2 人で競争するように走らせたり, ミニカーを交換させながら楽しく遊ぶ。
-

2 学期になり, 自分と同じような興味 (ミニカーを走らせる) をもつ仲間と一緒に遊ぶ姿が見られた。仲間と同じ場で遊びながら自分がやりたいこと, 自分の関心のあることに長い時間取り組むようになった。また, 自分の興味を持った遊びを続けた後は, 気持ちも安定し, 仲間との遊びをより楽しむ姿が見られるようになって考えられる。

事例 9 『三輪車』 (11 月)

K 男 : 一番はじめに三輪車に乗る。他の子どもも倉庫に三輪車をとりに来て乗る。三輪車をこいでプールの方に行く。＜平行・連合遊び＞

J 男 : プールに行く途中、道をふさぐようにして三輪車を横にして置いている。

K 男 : そのまま無理に行こうとする。

L 男 : 「あー、もう！！」と K 男に怒る。

K 男 : L 男に何も言わずバックする。

K 男 : R 子と D 子がやってきたので、続いて進む。

K 男 : 前に R 子と D 子の三輪車が止まって進まない。「どいてくれ！！どいて！」

K 男 : R 子と D 子が進まないの、バックして方向転換し、プールのまわりを走る。

その後も K 男は三輪車に乗って、同じように三輪車で遊んでいる仲間が道をふさいでいる時には「どいて！」などと大きな声で要求する姿、隣に来た仲間と笑いあう姿も見られた。

K 男は車や電車が大好きである。今までは、おもちゃを走らせて遊んでいた。K 男にとって三輪車に乗ることは、自分が乗り物に乗れる喜びと、自分で自由に動き回れる楽しさがあり、魅力的な遊びとなったのだろう。また、K 男は、前から来た子にバックして道を譲ったり、段差やカーブでひっかかった時も自分で対処したりするなど、三輪車の操作に自信が感じられた。

なお、この事例の 1 週間ほど前に、ハサミが上手に使えるようになり、いつまでも紙を切り続けていたことがあった。ハサミや三輪車など、できることが増え、自信がついてきたようだった。そのため、仲間に「どいて！」と自分から声をかけるなど、関わりも少しずつ増えているのではないだろうか。

1 学期は、初めての園生活で、不安も多く、保育者についていく行動が見られた。その後、K 男と同じように保育者の近くにいた仲間と一緒に過ごす行動が見られ始め、安心する存在が保育者から仲間へと広がった。2 学期になると、同じような興味をもつ仲間と対等な立場で遊ぶ姿も見られるようになった。仲間とのやりとりはあまり見られないが、場を共有しながら、自分の興味のあることに長時間取り組み、ひとり遊びが充実してきたと考えられる。また、ひとり遊びを満足するまで行うことで、自信につながり、仲間関係の広がりを支えていたのではないだろうか (図 1)。

4・5 月(1 学期)	6・7 月 (1 学期)	9・10 月(2 学期)	11・12 月 (2 学期)
保育者の近くで遊ぶ。 (J 男も同じ) 安心する。  J 男と一緒にいることが増える。	J 男についていき、 真似する。 保育者から少しずつ 離れて遊ぶ。 J 男がいなくなると不 安で保育者の近くへ。	J 男とミニカーで競争 する。(対等な立場) 自分の興味のあること (ミニカー並べ)をひと りで長時間行う。  ひとり遊びの充実	長時間はさみでの紙 切りに取り組む。 三輪車を自分で乗り こなす。  自信 自発的に行う姿 仲間関係の広がり K 男の自信
保育者・仲間と一緒に		遊びの充実	K 男の自信

図 1 3 歳児 K 男のひとり行動の変化

IV まとめ

本研究では、幼稚園の3, 5歳児のひとり行動に着目し、年齢による違いや時期的な変容を、量的に分析するとともに、前後の状況を含めて質的に検討した。その結果、3歳児では「傍観・大人」「ふり遊び」が多く、5歳児は、「傍観・子ども」「構成遊び」「平行・連合遊び」が多かった。また、3歳児のひとり行動では、不安から保育者を探したり、それぞれが自分のことを楽しんだりしていたが、5歳児はひとりで過ごしながらも目的を持って集中して取り組んだり、時々仲間とやりとりしたりするなど、仲間への関心や仲間意識が高かった。ひとり行動は、園生活への慣れや仲間関係への関心、保育内容や環境構成によって変容することが示された。

さらに、いざこざなど緊迫状態のときには、ひとりで過ごす時間をもつことで、気持ちの切り替えや立て直しができること、十分にひとり遊びを行うことによって、いずれ自発的に遊び出すことも示唆された。少し気になるひとり行動も見られたが、一般的に非社会的行動と捉えられがちなひとり行動の肯定的側面を示すことができたと言えるだろう。

幼児期において、いろいろな遊びの中から自分の興味、関心のある活動を選び、熱中できる活動を見つけていく時間を十分に確保すること、一人ひとりの遊びを充実させ、自分でできたという達成感を持てるような機会を作ることが必要である。また、幼児の姿を捉えるとき、「ひとりでいること」「ひとりで遊んでいること」だけに目を向けるのではなく、その子どもが置かれている状況や気持ちを理解するように努め、一人ひとりの発達のありようを見通しながら対応していくことが大切であろう。

今回は、3学期の様子を含めて分析することができなかった。3学期は、仲間関係がさらに広がり、ひとり行動にも変化がみられるのではないだろうか。今後は、3学期も含めた1年間の変化を検討する必要があるだろう。また、ひとり行動が多くみられた幼児がどのように成長し仲間関係が広がっていくのか、保育者の援助を含めて丁寧に検討したい。

謝辞

本論文をまとめるにあたり、お忙しい中ご協力いただきましたA幼稚園の先生方、および、子どもたちに心より深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- Coplan, R.J.(2000) Assessing nonsocial play in early childhood: Conceptual and methodological approaches. In K. Gitlin-Weiner, A. Sandgrund & C. Schaefer (Eds.), *Play diagnosis and assessment* (2nd ed., pp.563-598). New York : Wiley.
- Coplan, R.J., Rubin, K.H., Fox, N.A., Calkins, S.D. & Stewart, S.L. (1994) Being alone, and acting alone : Distinguishing among reticence and passive and active solitude in young children. *Child Development*, 65, 129-137.
- エリーズ・ボールディング著・松岡享子訳 (1998) 子どもが孤独 (ひとり) でいる時間 (とき) こぐま社
- 畠山美穂・畠山 寛・山崎 晃 (2003) 仲間とうまく関われない幼児はどのようにして社会的スキルを学習するか?—日常保育場面での遊びや保育者とのかかわりを通して— 保育学研究, 41 (1), 20-28.
- 小林 真 (2001) 幼稚園児の園生活におけるストレス対処行動の発達 保育者評定による調査 日本心理学会大会発表論文集, 65, 697.
- 倉持清美 (1994) 就学前児の遊び集団への仲間入り過程 発達心理学研究, 5 (2), 137-144.
- 森上史郎・今井和子 (1992) ひととのかかわりを育む保育実践 集団ってなんだろう ミネルヴァ書房
- 村岡由美子 (1998) 幼児の砂遊びにおける他児との関わりに関する研究—1人で遊んでいる幼児を対象に— 日本保育学会研究発表論文集, 51, 266-267.
- 大内晶子・櫻井茂男 (2005) 就学前児における非社会的遊びと社会的適応との関連 筑波大学心理学研究, 30, 51-61.
- 大内晶子・櫻井茂男 (2008) 幼児の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動に関する縦断的検討 教育心理学研究, 56, 376-388.
- 柴崎正行 (2003) 乳幼児にとって保育園のくつろぎ空間とは 発達, 96, 5-11.
- 淡野将大 (2008) ひとりで遊んでいる子どもはどのように遊びを変化させるのか?—自由遊び場面における非社会的遊びの変化プロセス— 発達研究, 22, 263-270.
- 淡野将太 (2009) ひとりで遊んでいる子どもの社会的行動特徴—静的遊びについて— 発達研究, 23, 107-114.

The changes and the meaning of solitary behaviors in preschoolers

— A Comparison between 3-year-olds and 5-year-olds —

TAKUBO, Miyuri and HORIKOSHI, Norika

Abstract

The purpose of this study is to examine the changes of solitary behaviors (being alone or playing without interaction) in 3-year-olds and 5-year-olds. In 3-year-olds, many instances of “onlooking behavior: adult” and “pretend play” were seen. In 5-year-olds, we observed many instances of “onlooking behavior: children”, “constructive play” and “parallel or

associative play”. The children’s solitary behaviors had changed through their adaptation to the kindergarten life, their interest in their peers, and the contents of the childcare. From some cases, we analyzed the meaning of solitary behaviors in preschoolers. As a result, it was suggested that solitary behaviors had led to the soothing and changing of their negative feelings, and enough solitary play had resulted in the children’s active play in the future.

【Key words】 3-year-olds and 5-years-olds, Solitary behaviors, Nonsocial play, Changes